

Message from Frontier



ディベロップメンタルケアを NICUの設計から考える

茨 聡 鹿児島市立病院総合周産期母子医療センター新生児内科部長

はじめに

2015年5月、新築移転により新しく生まれ変わった鹿児島市立病院(病床数574床)。新病院の建物は地上8階建てで、屋上に緊急搬送用ヘリコプターが離発着するヘリポートを備える。新生児集中治療室(NICU)をはじめとした総合周産期母子医療センターが整備・拡充された。新生児内科、産科、小児科、小児外科が統合され、出生前から小児期まで一貫した治療を行う成育医療センターとなった。新生児内科病棟はNICU36床、発育発達支援室(GCU)12床、新生児回復室32床の合計80床を有している。「病床数は旧病院と同じだが、病床面積は約

1,700m²と旧病院の1.6倍となり広々とした空間に生まれ変わった」と茨聡先生は話す。

今回はNICUの設計から考えられたディベロップメンタルケアについて鹿児島市立病院総合周産期母子医療センター新生児内科部長の茨先生にお話をうかがった。

24時間体制の救急搬送

1. 新生児救急搬送システムの構築

同科では、離島を含め鹿児島県内全域から、早産児および病的新生児の8割強にあたる年間約700名の新生児入院を受け入れている。そのうち、院内出生児は約450名(うち約250名が母体搬送)で、残り約250名は院外出生児である。「新生児医療ではわずかな遅れが死亡や障害につながることから、一刻でも早く治療を開始することが重要となる」と茨先生はいう。

新生児用の保育器や人工呼吸器など、特別な医療機器を備えた新生児専用のドクターカー(写真1)を24時間体制で運用しており、年間約100件の新生児搬送を行っている。ドクターカーは、医師1~2名、看護師1名が同乗し、すぐに出動できる体制になっている。

離島を含む長距離搬送には、当院が所有するドクターヘリのほか、鹿児島県の防災航空隊や海上保安庁、自衛隊のヘリコプターなどを積極的に活用している。屋上にヘリポートができたことで新生児や母体に負担をかけない搬送を短時間でできるようになった。ヘリコプターに



鹿児島市立病院外観

SAMPLE